

―青春小説―

◆ 自らを越えて (五) ◆

◆ 多谷 昇太 ◆



【夕日の最後のひとさしが消える…前に！】

はたしてこのまま新河に連れて行かれるのだろうか。しかしこの瞬間にさきほどの二重感覚の場面がまた戻った。いま一人の俺が忸怩たる思いで今しも消えなんとする窓の夕日を見ている。あの夕日に向かって若い俺はどこまでも駆けて行きたい。夕日に象徴された大いなるものの中へ馳せ参じたい。女子の田辺さんや矢内さんでさえ粛々とあの光の元へと歩んでいるのではないのか…。そう念じると、うつ屈しうつ積した想いを押しつけて怒りにも似た感情が俺の胸の奥から湧き起こって来、そして俺を突き動かした。階段の降り口にもどった俺は下の暗闇を挑むように睨みつけ、続いてこぶしを握った両腕を肩で猛烈にまわしながら、大声を発して階段を駆け下りて行った。「ウオオオオ…」。

以上が登山決行前に見た悪夢だったのであり、これをして躊躇するという我が悪癖を払いのけた次第。

「(お前の実態がどんなだか) わかっただろう?」とする新河の亡霊の示唆に、肌感覚をさえ凌駕する「霊感覚」でもって我が身の実態を、すなわち死んだように生きている毎日の実態を、いやもつと有り体に云えば「死そのものの実体」をさえ垣間見た俺にとって、もはや躊躇はなかった。今の自分ののつびきならぬ状態

が的確に判ったということである。ところで本人を殺してしまうことになるので付け加えておくが新河は自殺はおろか現実には死んでなどおらず、毎日ピンシャンとして高校生活を勤しんでいる。それがあのシチュエーションで夢に出たということは前出の彼との一件がいかに俺に傷心を催させたかということなのだろう。とにかく、かくして丹沢登山への腹は決まった。

(五) マドンナ、大伴朋子（おおともあきこ）

1968年9月22日曜日の早朝、まだ寝静まっている家族を起こさないようにして俺は川崎市高津区にある自宅の団地を出た。時刻は6時ちよつと前、西脇順三郎の詩「天気」に綴られた「覆された寶石のような朝の光」がさす中を、前の晩に準備万端整えたおむすび型のリュックを背負って軽快に歩き出す。この2百メートルほど先にある東急バスのバス停へ向かうのだがいつもとは違うキラバンシューズを履いた足裏の感覚がいやがうえにも高揚感を誘う。俺の今日の登山ルートは丹沢主脈縦走と予め決めていた。三の塔ルートから表尾根に出て、塔ノ岳↓蛭ヶ岳↓焼山と挑むのだが、ハッキリ云って縦走はかなりの健脚向けなのであり、さほどでもない俺にとつては正直云って荷

が重かった。ひよつとして無理かも知れないがとにかくトライしよう、やってみようと意気込んでいたのである。それは普段の意志薄弱さや躊躇癖を矯正する上に於てのことなのだが。なおこの縦走ルートについて一言付言するが普通ならこのルートは大倉尾根↓塔ノ岳↓蛭ヶ岳↓焼山となる筈なのだ。そのとつかりを三の塔尾根としたのは以前に登坂した折りこの尾根道が色々と興味深いものであることを知っていたのと、大倉尾根が別名バカ尾根と云われるように、単調な登り一辺倒のつまらないものだったからだ。さらに云わせてもらうならこの三ノ塔頂上が360度さえぎるもののない、眺め抜群のものであったから。西に富士山、北は南アルプス、南には相模湾が望まれ、そしてこの三ノ塔頂上自体がなだらかな逆お椀型で、あたかも登って来た丘の上ならぬ天上の園のごとき観を呈していたからだ。これは知る人ぞ知ることなのである。しかし尤もこのような眺め云々などと云うこと自体、縦走の観点からすれば余計事、軟弱事なのであり、ルートが長くなってしまう分とも合わせ、縦走など始めつから無理なのかも知れない。この設定・想定のがさがそもそも俺の人生そのものであるような気がしてならないのだが…。

さて日曜の早朝のことだからバス停には誰もいないだろうと思っていたのがさにあらず、バス通りに出る路地の両側が家並で見えないが、すぐ先の、突き当たりの丁の字を右に曲がったところにあるバス停からにぎやかな女性の声が聞こえて来た。一瞬で俺の顔がくもる。ひよつとして何かの行楽のグループが、分けても女性のグループがバスを待つて居はしまいか。これは俺の一番苦手なシチュエーションなのだ。そう云う分けは、これ以前のページで縷々述べて来た通りのこと…。根暗の的のごとき俺が現れるならこのすぐ先にいるグループにとつては迷惑千万なことだろうし、第一いつもそういう想定をしてみよう俺自身にとつて一番辛いことだった。どうしようか：バス停を変えようかとも思う。俺が住む大きな市営団地やまたバス通りの対面にある、こちらも一戸建形式の、やはり川崎市の市営住宅が広がるこの場所にはバス停が行く先別に4つほどあった。内2つは目の前のバス通りの対面にそれぞれ一つづつ、あと2つは通りの左奥にあるバスターミナル広場にあった。こちら側のすぐ目の前のバス停が武蔵新城駅行きで、ここから南武線・小田急線と乗り継ぐのが時間的にも運賃的にもベストなのだが、あと2つのバス停からも行けなくはなかった。しかし

ええい儘よ、そこにいるだろう女性グループが何者か知れず、まさかいつしよに丹沢まで行く分けじゃあるまいし、バス乗車の間だけ我慢すればいいだけのこと：などと自分に云い聞かせて俺は路地を曲がってバス停に出た。するとそこには3人の若い女性連れがいて、いずれも俺と同じリュックを背負った登山スタイルをしているではないか。内2人は知らなかったが残りの1人が俺にとつてはとんでもない人だったのだ。その名前まで知っていた。名を大伴朗子（おおともあきこ）と云つて俺と同じ高校に去年まで在籍していた俺より2つ上の先輩である。なぜ俺が彼女の名前を知っているかというと、それはズバリ彼女が我が校のマドンナだったからだ。才色兼備の（確か）女だてらに生徒会長を務めていた人で、そのルックスたるや輝くばかりと云う他はない。本人は否定しているそうだが皆がハーフではないかと噂するような、ハッキリ云つて白人女性そのものの顔付きと身体つき（つまりナイスボディ）をしていた。その美貌と云い活発さと云い、俺がイカレテしまうパターンの最たる女子生徒だったのだし、事実我が校の（特に男子）生徒で彼女を知らない者はいなかっただろう。しかしもちろん在籍当時は彼女が3年生で俺が1年坊だったし、いるんだかないない

んだかすら知れない根暗の俺であっては彼女の知己に  
【マドンナのプロフィール…？さて、こんなんでしょ  
うか？】



あずかることはなかった。もちろん偶然鉢合わせした  
今でさえ彼女には俺が誰であるのか知る由もなかった  
ろう。だがそれにしてもいきなり現出した女神と云う  
か俺の驚きは大きく、大伴さんら一行が登山スタイル  
であることも失念してしまい、一瞬二瞬ではあっても  
茫然自失の呈を俺は余儀なくされてしまった。しかし  
すぐにそれと気づいて、間違ひなく赤面しているだろ  
う自分の顔を対面のバス停や左奥のターミナルのバス  
停に向けて、わざとらしく腕時計を見つつ、バス停を  
選んでいるような素振りを俺は見せる。いまさらのよ  
うに彼女らのいでたちに気づき、これは堪らない、い  
たたまれないと思ったからだ。万が一彼女らも丹沢詣  
でだったとしたら同行程たる俺の存在は彼女らの目に  
付き、鼻に付くに違いないのだ。すなわち目障りな存  
在となってしまう。そんな思いはさせたくなかったし、  
元凶となる俺にあってはなおさら堪らなかつた。バス  
停の時刻表を見て決心をつけたようにひとつうなずい  
てから（本当は発車時刻など遠に知っていた、今いる  
この新城行きが一番早かつたのだ）通りの対面の綱島  
行きのバス停に移ろうとした刹那、それまで俺の出現  
とともにだんまりを決め込んでいた3人だったのが、  
いきなり他ならぬ大伴さんから俺に声がかかった。「あ

のう、村田君：じゃありません？」彼女の口から出た俺の名前に俺自身が驚愕する。なぜ大伴さんが俺の名前を知っているのだろうか？！あり得（う）べからざることだった。彼女の存在はどこにいても目立つので、例えば1年生時に毎朝の登校でいまと同じようにバスを待つ時などか、彼女は知らず、俺の方では必ず大伴さんの容姿を目に焼き付けていた。しかし彼女が「影」に過ぎない俺などを意識することはなかった筈だ。過去たった1回の快事を除いては彼女との接触など一切俺にはなかったのだから。その1回だけの接触というのを此処で披露せねばならないが、まさかその事（繰り返し、俺にとっては超快事だった）だけで彼女が俺の存在を知ったとはとても思えない。その折りに名前すら告げはしなかった。で、その快事というのとはわずかな時間だけ俺は彼女を横に抱きかかえるようにして彼女とダンスをしたことがあるのだ。それはフォーークダンスだったのであり、例の有名なオクラホマミキサーだった。どういう粋なはからいだったのか、あるいは滅多にない偶然だったのか知らないが、俺が1年生の時に（確か）体育祭の行事とかで男女によるフォーークダンスの披露が計画されていた。そのとき俺のクラスは体育の時間割だったのだが急遽3年生女子のクラ

スのダンスの練習相手に指名されたのだった。

【〜♪♪♪〜耳によみがえるオクラホマミキサーのメロディ。右横に抱えるのが大伴さんである。「おーい、一年坊！俺たちの女に手を出すな〜！」と校舎から三年男子らのやかみの声が掛かった】

